第8回 白川静漢字教育賞 選考結果

福井県では、本県出身の白川静博士の功績にちなみ、特色ある漢字教育を実践している方や、漢字文化の普及や生涯学習の推進に貢献している方、ならびに漢字に親しむ小・中学生を全国から公募、表彰しています。今回、11都府県から386点の応募があり、令和３年11月 27日（土）、福井県立図書館において表彰式が行われました。

福井県教育庁生涯学習・文化財課 TEL 0776-20-0559 Mail syoubun@pref.fukui.lg.jp

選考委員（敬称略）

棚橋　尚子氏（奈良教育大学教育学部教授）
加藤　　徹氏（明治大学法学部教授）
後藤　文男氏（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所研究員）
伊与登志雄氏（福井新聞社特別編集委員）
津崎　　史氏（白川静博士長女）
豊北　欽一　（福井県教育長）

（小・中学生の部のみ）
宮下　奈都氏（作家）
髙橋　和代氏（福井県中学校教育研究会国語部会長）
髙間　春彦氏（福井県小学校教育研究会国語部会長）

※ 令和３年10月、福井県庁にて選考委員会を実施しました。

一般の部

一般の部　講評（選考委員：後藤 文男 氏）

２年ぶりに開催された「第８回白川静漢字教育賞」（一般の部）には、県外 12 点、県内４点、計 16 点の応募がありました。点数こそ多くはありませんでしたが、内容の濃い実践が全国から寄せられ、コロナ禍の厳しい状況の中でも日々実践に取り組んでおられる応募者の皆さんに、選考委員皆が励まされる思いになりました。

今年の応募の特徴は、漢字を覚えることが苦手など、発達の課題を持った児童にどのように漢字教育を取り組んでいけばよいのか、その奮闘の記録がいくつもあったことです。どれも個々の児童に向き合う真摯な思いと工夫に満ちたずしりと重い実践の記録でした。また、一度受賞された方々が、さらに新しい可能性に挑戦されている姿にも大いに励まされ、力を得た気が致しました。

この漢字教育賞も、最近はやや応募者が減少気味です。まだまだ眠っている実践は県内外に数多くあると思っています。何とか眠っている実践を掘り起こし、より多くの応募者が集う「漢字教育賞」へ発展してくれることを選考委員一同心から願っております。

最後となりましたが、改めて受賞者の皆さんにお祝いを申し上げ、今回の講評とさせていただきます。

一般の部　最優秀賞

（講評：後藤 文男 氏）

子どもの主体を起こす読み優先の漢字教育

滋賀県
子どもの主体を起こす漢字教育研究会共同代表
上野　芳樹 氏

1　実践の概要

漢字の意味理解を踏まえた読み優先の漢字指導を行うことで、全くひらがなを理解できなかった長男が教育漢字すべてを習得したという井上知子氏の子育て体験に基づき、「意味理解」「読み」の確立の上に「書き」の指導を行う読み優先の漢字学習の合理性を実証すべく、独自の教材を開発し、学校現場での実証研究を進めてきた。

2　実践の内容

(1) 主要３教材の開発

①「漢字音読名人」
文章を用い、文脈による漢字の読みの習熟を目的として作成した教材。

②「一日一漢字」
漢字の成り立ち・読み・文例・筆順をコンパクトにまとめたもの。『白川静博士の漢字の世界へ』（平凡社）に依拠し、解説・文例をイラスト入りで示し、筆順動画も加えた。

③「漢字書き名人」
「漢字音読名人」・「一日一漢字」と連動させる形で作成した書き習熟教材。「文を綴る中で漢字を使う」ことに重点を置いて作成。

(2) 実践の歩み

平成 28 年度、「漢字音読名人」を試作し、東近江市内有志の学級で試行。翌 29 年度には市内７校で取り組まれ、そこで評価を得て、現在は県下 20 校以上で活用されている。平成 30 年度、「読み」とともに「意味理解」が必須であることから「一日一漢字」を、更に令和２年度には「読み」から「書き」へ誘う「漢字書き名人」を開発。全教材を使って読み優先の漢字学習に取り組む学校も出てきている。

3　実践の成果

一連の全教材を使い、年間を通して指導した学級から「漢字の習得率や読書量が劇的に高まった」という事例も生まれている。我々の提唱する読み優先の漢字学習は、誰もが学びやすいユニバーサルデザイン教育の典型であり、子どもの主体を起こし仲間との協働を豊かに育む「教育」そのものであるという確信を深めつつある。

〈教材：漢字音読名人〉

〈教材：一日一漢字〉

講評 今回特別奨励賞を受賞された井上知子氏の「読み優先」の漢字指導体験を核に、どの子にも漢字を理解させるために、段階を追って漢字を学ばせる「漢字音読名人」や「漢字書き名人」など様々な工夫をしかけながら、学校全体、地域の小学校を巻き込み、何年もかけて継続的に広げられた、そのスケールの大きな実践の厚みが高い評価を得た。